

平成 22 年 4 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19320057

研究課題名（和文） 中国語の構文及び文法範疇形成の歴史の変容と汎時的普遍性 中国語歴史文法の再構築

研究課題名（英文） Diachronic Changes and Panchronic Universal Properties of Constructions and Grammatical Categories in Chinese - a Reconstruction of Historical Chinese Grammar

研究代表者

木村 英樹（KIMURA HIDEKI）

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：20153207

研究代表者の専門分野：人文学（中国語学）

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：歴史文法、ヴォイス、存在文、語順、疑問代名詞、上古中国語、中古中国語、近世中国語

1. 研究計画の概要

本研究課題の目的は、中国語の歴史文法に関する従来の個別的・記述的成果を踏まえつつ、近年目覚しく深化を遂げている現代中国語文法の理論的研究の成果を近代以前の中国語に適用することにより、上古から現代に至るまでの中国語の文法事象の歴史の変容（多様性）と汎時代的普遍性を究明することにある。

現代中国語に存在するさまざまな文法範疇や文法構造の意味的および形式的特質は、そのすべてがそれ以前の中国語に存在したわけではない。それらのうちのあるものは古代中国語の時代から現代まで汎時的に継承されているが、あるものは多様な変容を遂げて現在に至っている。本研究課題は、5名の研究者が、近年の現代中国語の研究を通して得られた各種の文法範疇や文法構造の意味と形式に関する有益な知見を参照しつつ、各時代における様相を詳細に検討し、その成果を共同討議し、それらの作業を通して各時代間の差異とそれを生み出すメカニズムを明らかにしようとするものである。同時に、古今を通じて不易の中国語としての普遍的特質や、汎時代的に有効に機能している文法のおよび意味的範疇の存在を明らかにし、加えて、それらの範疇化を動機づける関与的なパラメータの究明を目指すものである。

2. 研究の進捗状況

(1) 上古期以来用いられてきた「有」字存在文（動詞「有」を述語として構成される存在文）を対象に史的対照研究を行い、用例の精査と綿密な理論的分析を通して、以下のような重要な知見を獲得した。

現代中国語に存在する「リアルな時空間における具象的な事物の存在」を表すタイプの「有」字存在文が上古期には未成熟であった。『論語』に代表される上古前期の中国語においては、動詞「有」の表す基本的な意味は<存在>ではなく、<所有>であった。

リアルな時空間における事物存在を表す「有」字存在文の用法は、<所有>を表す用法から拡張したものであり、その萌芽は『史記』に代表される上古後期に見られ、中古期において発達する。

(2) 歴史的に形態変化に著しく乏しい中国語にあっては、従来ヴォイスという文法範疇の存在が等閑視されてきたが、本研究課題では意味論的および構文論的な観点からヴォイスという現象を捉え直し、上古から現代に及ぶ範囲でヴォイス的現象を考察した。その結果、中国語においても、受身と使役の対立、間接使役と直接使役の対立、さらには対格構造と非対格構造の対立などが、上古から現代に至るまで、さまざまなかたちで明確な構造上の対立を伴って存在することが実証的か

つ理論的に論証され、中国語の歴史的多様性と汎時的普遍性の一端が明らかにされた。

(3) 語順の問題については、上古期から中古期にかけての疑問代名詞目的語の語順変化の現象に焦点を当て、7つの文献を対象とする悉皆調査に基づき、当該の変化が3つのタイプに分かれることを論証した上で、それらの変化を、上中古間に生じた複音節語の急増と機能語体系の崩壊という言語構造全体の変化に起因するものとして位置づけ、上中古期における疑問代名詞目的語の語順変化のメカニズムの一端を明らかにした。

3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している。

(理由)

本研究課題の柱として重点的に進めてきた存在文、語順およびヴォイスに関する研究において、それぞれに、当初の目的である「中国語の文法事象の歴史の変容(多様性)と汎時的普遍性の究明」につながる実証的または理論的成果を上げることができた。それらの成果は、いずれも論文、著書あるいはシンポジウムでの報告を通して公表され、とりわけ存在文に関しては、2009年の日本中国語学会全国大会において、本研究課題の代表者である木村、研究分担者である木津、大西の計3名が招待講演者として招かれ、シンポジウム「存在表現の類型と歴史」が開かれるなど、本課題の成果が国内の学界においても高く評価されている。以上の点から、おおむね順調に当初研究目的を達成していると判断する。

4. 今後の研究の推進方策

存在文に関する研究を中心に一層の深化を図り、記述と分析の精度を高め、とりわけ近代以後の存在文の諸相と、その成立に密接な関連を持つ数量詞による個体化表現の歴史の変容の問題を探求する。

さらに、2010年度は最終年度にあたるため、これまでの研究成果を総括し、いまだ口頭発表に留まっている成果については、それらの活字化に取り組み、国内外への積極的な発信を目指す。また、本研究課題の成果が今後の中国語文法史の再構築にいかなる貢献が可能か、その具体的な方策を検討する。

5. 代表的な研究成果

[雑誌論文](計19件)

大西克也、上古漢語“使”字使役句的語法化過程、『何樂土紀念文集』pp.11-28、2009年、査読無

大西克也、再論上古漢語中的“可”和“可以”——古漢語の語態試探之二、『中国語言学』第1巻、pp.149-165、2009年、

査読無

松江崇、也談早期漢訳佛典語言在上中古間語法史上的價值、『漢語史學報』第8輯、2009年、pp.114-133、2009年、査読有
木村英樹、中国語疑問詞の意味機能属性記述と個体指定、『日中言語研究と日本語教育』第1巻、pp.12-24、2008年、査読有

玄幸子、李氏朝鮮期中国語会話テキスト『朴通事』に見られる存在文について、『外国語教育研究』第14号、pp.1-12、2007年、査読無

[学会発表](計17件)

木村英樹、現代中国語における存在表現の諸相と「時空間存在文」の特性、日本中国語学会第59回全国大会(北海道大学)、2009年10月24日

大西克也、所有から存在へ——上古中国語における「有」の拡張——、日本中国語学会第59回全国大会(北海道大学)、2009年10月24日

木津祐子、「有」が担う存在とは——『朱子語類』が示す知識と存在——、日本中国語学会第59回全国大会(北海道大学)、2009年10月24日

玄幸子、唐代“有字存在文”分析、漢語歴史詞彙与語義演变學術研討会(中国・杭州)、2008年8月25日

大西克也、再論上古漢語中的“可”和“可以”、第6回国際古漢語語法研討会(中国・陝西師範大学)、2007年8月14日

[図書](計4件)

松江崇、好文出版、『古漢語疑問實語詞序変化機制研究』、2010年、総288

大西克也、宮本徹、岩月純一、福井玲、陳力衛、放送大学教育振興会、『アジアの漢字文化』、2009年、pp.1-180

岩田礼、村之上伸、木津祐子、松江崇、白帝社、『漢語方言解釈地図』、2009年、pp.60-69(松江)、114-121(木津)

生越直樹、木村英樹、鷲尾龍一、くろしお出版、『ヴォイスの対照研究——東アジア諸語からの視点』、2008年、pp.1-20およびpp.65-107